論　説

南部奴隷取引の発展およびその拡大と支持の背景

― ネットワークによる経営戦略と世界観の形成 ―

柳生　智子*

はじめに

本論文は19世紀前半にアメリカ南部地域で定着した奴隷取引の発展による様々な変化への奴隷商人の対応と，取引地域・規模の拡大，南部地域全体の政治的・経済的変動の影響を受けての奴隷商人の意識・世界観の形成を分析することを目的としている[1)]。具体的には，当時バージニア州を拠点として活動していた奴隷商人，ライス・C・バラード（Rice C. Ballard, 1800年？～1860年）をはじめとする南部最大級の奴隷取引業者の文書を中心に，取引網拡大の過程，業務の分析，さらに取引の際に直面した多様なリスクへの対応を説明する[2)]。また，同時期の南東部から南西部への人口移動，奴隷制領土の拡大の動きの中で，奴隷取引が南部社会でいかなる意味を持つようになったのかを指摘し，最終的に奴隷取引と奴隷商人の活動が南部経済全体および大西洋経済にいかに関わっていたかについて考察を加える。

奴隷取引に関する研究はこの20年で急速に増えている。1989年のマイケル・タッドマン（Michael Tadman）による研究以降，奴隷取引の巨大な規模と南部経済発展への多大な貢献については歴史家・経済史家間で共通の認識となり，2000年以降，ウォルター・ジョンソン（Walter Johnson），ロバート・グドメスタッド（Robert Gudmestad），スティーブン・デイル（Steven Deyle）らの総合的な研究の成果が加わり，奴隷取引は南北戦争前の南部の主要ビジネスであったという解釈が定着した。本論文は昨今の研究動向を踏まえた上で，南部外からの影響や対外関係を考慮しつつ，商人の商業観・経営能力を分析することにも力点を置く[3)]。

---

*柳生　智子（Tomoko YAGYU）：慶應義塾大学経済学部専任講師。ノースカロライナ大学チャペルヒル校大学院歴史学研究科博士課程修了，Ph.D.（歴史学）。「アメリカ南部プランテーションにおける奴隷管理と奴隷資産―東部海岸地域のプランターの経営について―」，『三田学会雑誌』第92巻１号（1999年），「奴隷商人と西部移住―アンティベラム期アメリカ南部における奴隷取引と商人ネットワーク―」，『三田学会雑誌』95巻２号（2002年）など。

1)本論文は2006年にノースカロライナ大学チャペルヒル校大学院歴史学研究科に提出された博士論文 “Slave Traders and Planters in the Expanding South: Entrepreneurial Strategies, Business Networks, and Western Migration in the Atlantic World, 1789-1859” Ph. D. diss., University of North Carolina at Chapel Hill, 2006. の一部を修正・加筆したものであり，2007年10月にアメリカ経済史学会第50回大会（熊本大学）で報告した内容に基づいている。本論で扱う「奴隷取引」はアメリカ南部内で奴隷商人を介して行われた奴隷の売買のことであり，一般に奴隷を売却した南東部（バージニア，メリーランド，南北カロライナなど）から購入した南西部（ミシシッピ，ルイジアナ，テキサスなど）に向けて長距離取引されたが，同時に近距離や州内の取引も幅広く行われていた。

2)本稿で用いる史料はUniversity of North Carolina at Chapel Hill, Southern Historical Collection 所蔵の Rice. C. Ballard Papers（以下Ballard Papers）が中心となる。

3)フィリップスに始まる南部史は奴隷制度を善意の制度として解釈したが，後にスタンプやフォーゲル，エンガーマンらによって搾取の実態が明らかになっていった。Ulrich B. Phillips, *American Negro Slavery: A Survey of the Supply, Employment, and Control of*

奴隷制が有益な経済システムであったという主張が広まる一方，奴隷制社会が都市化，消費市場の発展，製造工程や交通における最新の技術の導入などの動態的な経済発展を阻む要素を含んでいたことは，北部経済の発展と比較するまでもなく，否めない事実である。北部の奴隷制廃止運動の指導者たちは，奴隷制社会は資本，技術革新，経営的精神を欠くという見解を軸に南部社会への批判を展開した。しかし，南部経済の発展を阻む要因と見られたプランターや商人は，こうした批判とは異なり，綿花生産の世界市場における需要の継続的成長を楽観視し，自由貿易の円滑な進展のための政治的な枠組み作りに尽力した。南部指導者層の視点では，南部全体で見られた国内開発の遅れについても，高い需要に支えられた国際商品の安定的・継続的生産と需要がある限りその遅れを相殺することが可能で，あえて他の産業を満足させるためのインフラの整備を進める必要性は無かった。北部で定着していた，南部の奴隷取引と奴隷商人のイメージとは異なり，実際に取引に携わった商人はオークションで奴隷を売却する際，ニューヨークの銀行の資金状況やリバプールの綿花価格，その価格を決定するランカシャーの繊維工場の生産高やロンドンの金融動向の情報などを綿密に計算し，細心の注意を払って取引を行っていたことを本論文で確認する。

19世紀は世界的市場統合の時代といわれ，とりわけ商品や資本市場の統合，自由貿易政策の実現，国際的人口移動などの特徴が見られたが，国際的商業ネットワークの構築や商人の国際的視野の形成についてはそれ以前から存在していた。近年，アメリカ南部は新世界の奴隷制社会の一例としてより大きな枠組みから比較分析され，同時代のアフリカ史やラテンアメリカ史と関連付けた研究が増え，特にデイビッド・B・デイビス（David Brion Davis），デイビット・エルティス（David Eltis），スタンリー・エンガーマン（Stanley Engerman）らの研究は産業化，資本主義的精神，新世界での労働システムの発展過程を結びつける枠組みを提供し，この分野の研究を大いに進展させた[4]。

一方，植民地期から南北戦争にいたるまでの北アメリカの対外関係分析の方法として，アトランティック史観は以前から一つの視角として存在したが，近年，４大陸に跨る変動を包括的に捉える機能的なユニットとして再び注目されている。ラッセル・メナード（Russell Menard），ジョン・マクカスカー（John Mc Cusker），ジャック・グリーン（Jack Greene），

Negro Labor as Determined by the Plantation Regime, D. Appleton, 1918; Kenneth M. Stampp, *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*, Vintage, 1956; Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery*, Little Brown, 1974. フォーゲルらのような計量的分析を用いた奴隷研究は社会史・文化史研究の隆盛と人道的観点からの批判を受けて減少した。一方，国内奴隷取引の研究については，バンクロフトが奴隷取引は専門化した商人によって幅広く行われ，西部へ奴隷を送り込む手段として定着していたことを早くから指摘していた。Frederick Bancroft, *Slave Trading in the Old South* reprint 1931, University of South Carolina Press, 1996. 1980年代以降の奴隷取引の研究の代表的なものに以下がある。Michael Tadman, *Speculators and Slaves: Masters, Traders and Slaves in the Old South*, University of Wisconsin Press, 1989; Walter Johnson, *Soul by Soul: Life Inside the Antebellum Slave Market*, Harvard University Press, 2000; Robert Gudmestad, *A Troublesome Commerce: The Transformation of the Interstate Slave Trade*, Louisiana State University Press, 2003; Steven Deyle, *Carry Me Back: The Domestic Slave Trade in American Life*, Oxford University Press, 2005; Walter Johnson ed. *The Chattel Principle: Internal Slave Trade in the Americas*, Yale University Press, 2004.

[4] David Brion Davis, *Inhuman Bondage: The Rise and Fall of Slavery in the New World*, Oxford University Press, 2006; David Eltis, Frank D. Lewis, and Kenneth Sokoloff eds., *Slavery in the Development of the Americas*, Cambridge University Press, 2005; David Eltis, *The Rise of African Slavery in the Americas*, Cambridge University Press, 2000; Stanley L. Engerman, "The Atlantic Economy of the Eighteenth Century: Some Speculation on the Economic Development in Britain, America, Africa and Elsewhere," *Journal of European Economic History* Vol.24 (1995), pp. 145-175; Joseph E. Inikori and Stanley L. Engerman eds., *The Atlantic Slave Trade: Effects on Economies, Societies, and Peoples in Africa, the Americas, and Europe*, Duke University Press, 1992.など。

バーナード・ベイリン（Bernard Bailyn）などによる一連の研究・再考により，北アメリカが植民地時代から西ヨーロッパを中心とした世界貿易・商業の「周縁」として一端を担ってきたことは明らかになっており，アメリカ史のグローバル化の検討という昨今の研究動向の影響下では，この方向性は必然的な流れであった。本論文では商業ネットワークと商人の商業観・世界観の大西洋経済との関連においては，植民地期から南北戦争期まで連続性が見られるという認識で議論を進める[5]。

南部の綿花経済についても，ハロルド・ウッドマン（Harold Woodman）やギャビン・ライト（Gavin Wright）の研究によって既に多くのことが明らかになっているが，近年では世界綿花市場の発展と流通に着目し，綿花の作り出す「帝国」について論じるスヴェン・ベッカート（Sven Beckert）の研究や，綿花を中心とした自由貿易主義の進展と南部の政治経済との関連を詳細に分析したブライアン・ショーエン（Brian Schoen）の研究など新たな展開が見られる。いずれも綿花貿易と南部についてより国際的な視野からの分析を重視しており，従来の南部経済史を世界経済の枠で書き換えることが昨今の一つの傾向であると言える。本研究も，国内奴隷取引という特定の地域内での取引を国際的動向と切り離さずに分析し，新しい視角を提示することが目的であり，最大の課題でもある[6]。

Ⅰ．大西洋奴隷取引と建国期バージニア

研究動向で述べたように，バージニア植民地は最近ではエイプリル・ハットフィールド（April Hatfield）やアリソン・ゲイムズ（Alison Games），かつてはマクカスカーとメナードらの研究で，イギリスを中心とした大西洋経済の周縁地域に位置したことは既に明らかにされている。17，18世紀にはイギリスの各植民地経済圏は，植民地同士の横の繋がりよりも，それぞれがロンドンと密接な関係を築く大アトランティック経済圏“one grand Atlantic

---

[5]アメリカが含まれる大西洋史という枠組みはイギリス帝国史研究から派生した議論・分析が主流である。John J. McCusker and Russell R. Menard, *The Economy of British North America, 1607-1789*, University of North Carolina Press, 1985; Jack Greene, *Peripheries and Center: Constitutional Development in the Extended Polities of the British Empire and the United States, 1607-1788*, University of Georgia Press, 1986; David Armitage and Michael J. Braddick eds., *The British Atlantic World, 1500-1800*, Palgrave, 2002; Elizabeth Mancke and Carole Shammas eds., *The Creation of the British Atlantic World*, Johns Hopkins University Press, 2005; David Hancock, *Citizens of the World: London Merchants and the Integration of the British Atlantic Community, 1735-1785*, Cambridge University Press, 1995.など。他のヨーロッパ諸国も本国と植民地との関係の枠を出ないものが多い。アトランティック研究の最近の代表作は Bernard Bailyn, *Atlantic History: Concepts and Contours*, Harvard University Press, 2005;（バーナード・ベイリン著，和田光弘・森丈夫訳『アトランティック・ヒストリー』（名古屋大学出版会，2007年））; Douglas R. Egerton, Alison Games et al eds., *The Atlantic World: A History, 1400-1888*, Harlan Davidson, 2007; Jorge Canizares-Esguerra and Eric R. Seeman eds., *The Atlantic in Global History, 1500-2000*, Prentice Hall, 2006; John Thornton, *Africa and the Africans in the Making of the Atlantic World, 1400-1680*, Cambridge University Press, 1992; John J. McCusker and Kenneth Morgan eds., *Early Modern Atlantic Economy*, Cambridge University Press, 2000; Christine Daniels and Michael V. Kennedy eds., *Negotiated Empires: Centers and Peripheries in the Americas, 1500-1820*, Routledge, 2000.など。一方，イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国が同時期にアジア・ユーラシア方面との交流を活発化させていたことを考慮すると，大西洋という枠組みそのものに限界があるという批判もある。特にPeter A. Coclanis, “Drang Nach Osten: Bernard Bailyn, the World-Island, and the Idea of Atlantic History,” *Journal of World History* Vol.13, 2002, pp.169-82; Peter A. Coclanis ed., *The Atlantic Economy during the Seventeenth and Eighteenth Centuries: Organization, Operation, Practice and Personnel*, University of South Carolina Press, 2005の序章; “Forum: Beyond the Atlantic,” *William and Mary Quarterly*, 3rd series, Vol. 63, No.4, 2006. 掲載の各論文。

[6]Harold D. Woodman. *King Cotton and His Retainers: Financing & Marketing the Cotton Crop of the South, 1800-1925*, University of Kentucky Press, 1968; Gavin Wright, *The Political Economy of the Cotton South: Households, Markets, and Wealth in the Nineteenth Century*, Norton, 1978; Sven Beckert, “Emancipation and Empire: Reconstructing the Worldwide Web of Cotton Production in the Age of the American Civil War,” *American Historical Review* Vol. 109, 2004, pp.1405-1438; Brian Schoen, “The Fragile Fabric of the Union: The Cotton South, Federal Policies, and the Atlantic World, 1783-1861,” Ph.D. diss., University of Virginia, 2004.

economy”を形成していた[7]。

チェサピーク湾岸地域を含むバージニア植民地では17世紀から奴隷を輸入していた。遅れて大西洋奴隷貿易に参入したイギリスは1700年ごろには貿易体制を完成させ，1730年までには同貿易を支配するようになっていた。バージニア植民地ではイギリス領西インド諸島経由，もしくはアフリカから直接奴隷が輸入され，初期段階では西インド諸島のバルバドスやリーワード諸島で見られた貿易体制をモデルとし，さらに社会制度・法律体系も西インド諸島のそれをそのまま移管したものが定着していった。バージニアに流入した奴隷数も西インド諸島での経済動向に大きく影響された。特に西インド産砂糖価格の変動は，その価格の低下がチェサピーク湾岸地域に流入する奴隷の数を増やす方向に働いたため，重要な指標となった[8]。

バージニアにおける奴隷貿易の初期段階ではロンドンの奴隷商人が中心となって活動していたが，18世紀初頭までにブリストルの商人が台頭し，やがてリバプールの商人が貿易を独占していった。リバプールの商人はカーゴ・システムと呼ばれる方針を導入し，イングランド西部に位置する地理的優位性を持ち，小規模船によって回転率を速めることが可能であった。ゆえに，急速に奴隷貿易の中心都市としての地位を確立したが，一方で奴隷貿易の資金に関してはロンドンが依然として重要な地位を継続した。結果的に奴隷貿易の資金面はロンドン，実際の取引は西部の港湾都市，といった分業体制が成立し，18世紀半ばには奴隷貿易のリスクをイギリス国内で地理的に分散する形になった。大西洋貿易での奴隷売買はバージニアでは60日間の為替手形が一般的で，それを３，６，９，12ヶ月まで延長して支払うケースが広く見られた[9]。

植民地側，本国側の体制が整うに従い，大西洋奴隷貿易はバージニアをはじめとする東部植民地において不可欠な貿易になる一方，1772年にバージニアでは奴隷貿易の継続について植民地議会から国王に対し，輸入を禁止する申請がなされた。1774年の召集議会でも議題に上り，既に飽和状態となっていた奴隷人口と余剰奴隷の問題について活発に議論された。独立後の

---

[7] April Lee Hatfield, *Atlantic Virginia: Intercolonial Relations in the Seventeenth Century*, University of Pennsylvania Press, 2004; Alison Games, *The Web of Empire: English Cosmopolitans in an Age of Expansion*, Oxford University Press, 2008; Peter C. Mancall ed., *The Atlantic World and Virginia, 1550-1624*, University of North Carolina Press, 2007; McCusker and Menard, *The Economy of British North America*, pp. 86-87.

[8] Bruce A. Ragsdale. *A Planter's Republic: The Search for Economic Independence in Revolutionary Virginia*, University of Missouri Press, 2003, pp.113-114; Hatfield, *Atlantic Virginia*, pp. 145-149, 86-92. バージニアのプランターはバルバドスのプランターと緊密なつながりを持つ者が多く，バージニアのノフォークではバルバドスの元プランターが集中したコミュニティが形成されていた。アフリカからアメリカに奴隷を運んだヨーロッパ船の数についてはEltis, *Rise of African Slavery*, p.9。西インド諸島の砂糖生産についてはRichard S. Dunn, *Sugar and Slaves: The Rise of the Planter Class in the English West Indies, 1624-1713*, Norton, 1973; David Richardson, “The Slave Trade, Sugar, and British Economic Growth, 1748-1776,” *Journal of Interdisciplinary History*, Vol. 71, No. 4, 1987, pp.739-769 ; Lorena Walsh, “Mercantile Strategies, Credit Networks, and Labor Supply in the Colonial Chesapeake in Trans-Atlantic Perspective,” in Eltis, Lewis, and Sokoloff eds., *Slavery in the Development of the Americas*, p. 95. また，チェサピーク湾岸地域での人口構成の変化も奴隷貿易に影響を与えた。18世紀半ば以降，奴隷が自然増加し始め，アフリカからの直接輸入は減少した。Philip D. Morgan, *Slave Counterpoint: Black Culture in Eighteenth-Century Chesapeake and Lowcountry*, University of North Carolina Press, 1998.

[9] カーゴ・システム（cargo system）はロンドンを中心とした大商家から独立した新興商人が植民地に定住し，中小規模農家を対象に低金利でクレジットを提供してステイプル作物取引を請け負った，植民地貿易の新しい商業システムであった。詳しくはJacob Price, *Capital and Credit in British Overseas Trade: The View from the Chesapeake*, Harvard University Press, 1980. ブリストル船は１隻あたりの奴隷数が多く，ブリストル商人は売却の際の為替手形についても積極的に長期のクレジットを提供した。リバプール船はロンドンよりも小さく，着岸地についても柔軟性が持てた上，その商人はロンドンと強いつながりを持つランカシャー南部地域の大規模な為替市場の恩恵を受けていたと言われる。12ヶ月から18ヶ月に及ぶ長期のクレジットを提供できた点もリバプールの強みであった。同様の経営の躍進はタバコ取引のグラスゴー商人，羊毛を扱ったリーズ商人にも見られた。R.C. Nash, “The Organization of Trade and Finance in the British Atlantic Economy, 1600-1830,” in Coclanis, *The Atlantic Economy*, pp. 102, 124-127; Lorena Walsh, “Mercantile Strategies,” pp. 101-102 ; David Richardson, “The British Empire and the Atlantic Slave Trade, 160-1807,” in P.J. Marshall ed., *Oxford History of the British Empire*, Oxford University Press, 1998, pp.446-449; Kenneth Morgan, *British Transatlantic Slave Trade*, Pickering & Chatto, 2002, p. 76.

1778年には「この連邦に今後奴隷は海路からも陸路からも輸入されるべきでなく，また何人も奴隷を売却・購入目的で輸入するべきではない」という要求が議会に提出され，通過した。当時のバージニア邦議会で権力の中枢にあったプランター層は奴隷輸入の継続によって投資対象であった奴隷の価値が下がることを恐れ，大西洋奴隷貿易が植民地時代と変わらずイギリス資本を中心に展開されていることに強い反感を抱いていた。実際，独立前には90％以上の奴隷がアフリカから直接輸入されるようになっていたが，その奴隷を運んだ船舶の86％がイギリス商人所有の船であり，89％の奴隷がイギリス商人によって輸入されていた[10]。バージニアに続いて多くの南部州で奴隷輸入を禁止する法が採択されたが，その効果は薄く，その主な理由として密輸が大規模で継続したことと，1787年から1798年の間に唯一南部で奴隷輸入を継続していたジョージアが他州に奴隷を送り込んでいたことの２点があげられる[11]。

1787年の憲法制定会議ではサウスカロライナとジョージアが奴隷貿易の継続を主張し，連邦からの干渉に反発した一方，バージニアとメリーランドは貿易の廃止を支持して北部諸州と合意したため，南部内で対立が生じた。ここでサウスカロライナの代表であったチャールズ・ピンクニー（Charles Pinckney）は「バージニアに関しては奴隷の輸入を停止することで利益を得るであろう。停止することで奴隷の価値は上がり，バージニアは必要以上の奴隷を所有している」ため，その余剰でジョージアやサウスカロライナの不足分を補える，と発言している。ピンクニーはこの時点で南西部領土において奴隷の需要が高まっていることを十分承知しており，国内奴隷取引が活発になれば，バージニアの余剰奴隷の取引価格は上昇していくであろうと予測した。激しい議論の末，この会議では連邦による奴隷輸入の是非の決定については20年後まで先延ばしとされ，それまで奴隷輸入の継続・廃止については各州の判断にゆだねられたため，ジェームズ・マディソン（James Madison）は「この20年間で，奴隷を輸入する自由から懸念されるすべての損害が生じることになるだろう」と先行きを案じた[12]。バージニア議会は一貫して人道的立場から奴隷輸入の廃止を表明していたが，結果的にピンクニーの予想通り，20年の間に以前から芽生えつつあった国内奴隷取引のビジネスが本格的に開始されることになった。

建国初期から南部の奴隷は漸次的に解放

[10] Steven Deyle, “By Farr the Most Profitable Trade: Slave Trading in British Colonial North America,” *Slavery and Abolition*, Vol.10, 1989, pp.108-112; Steven Deyle, “The Irony of Liberty: The Origins of the Slave Trade,” *Journal of Economic Review*, Vol. 12, 1992, pp.40-47; Adam Rothman, “The Domestication of the Slave Trade in the United States,” in Johnson ed., *Chattel Principle*, p.35; Susan Westbury, “Analyzing a Regional Slave Trade: The West Indies and Virginia, 1698-1775,” *Slavery and Abolition*, Vol.7, 1986, pp.241-256. 引用はWinifred H. Collins, *The Domestic Slave Trade of the Southern States*, Broadway Publishing, 1904, p.109.

[11] James A. McMillin, *The Final Victims: Foreign Slave Trade to North America, 1783-1810*, University of South Carolina Press, 2004, pp. 5-7; Tadman, *Speculators and Slaves*, pp. 1-19; Johnson ed., *Chattel Principle*, p. 4.

[12] 憲法制定議会での「1808年条項」および「州際通商条項」の議論についてはDavid L. Lightner, “The Founders of Interstate Slave Trade,” *Journal of the Early Republic*, Vol.22, 2002, pp. 25-51; Don E. Fehrenbacher, *The Slaveholding Republic: An Account of the United States Government’s Relations to Slavery*, Oxford University Press, 2001, pp.29-47; Deyle, “Irony of Liberty,” p.46. 引用はTadman, *Speculators and Slaves*, p.15; McMillin, *Final Victims*, p.97. 20年の時限が迫ると，南部内での奴隷の需要は増加傾向になり，連邦による輸入禁止決定への恐れから，サウスカロライナでは1792年に制定した輸入禁止法案を1803年に撤回し，1804年から再びアフリカから奴隷を輸入し始めた。サウスカロライナの輸入再開についてはMcMillin, *Final Victims*, pp.7-11; Fehrenbacher, *The Slaveholding Republic*, pp.141-144. 1803年のルイジアナ購入がサウスカロライナの輸入再開の契機となったという議論はJed Handelsman Shugerman, “The Louisiana Purchase and South Carolina’s Reopening of the Slave Trade in 1803,” *Journal of the Early Republic*, Vol. 22, 2002, pp.263-290.参照。1804－1808年の間にサウスカロライナに輸入された奴隷は40,000～50,000人と推定される。1783年から1810年の間にアフリカから170,000人以上の奴隷が北アメリカに到着し，そのうち100,000人は1800年代に到着している。ピンクニー引用はTadman, *Speculators and Slaves*, p.15, マディソンはMcMillin, *Final Victims*, p.97 より。マディソンは最終的にはこの決定は一時的な悪として連邦の分割を防ぐために必要な決断であったと擁護した。

（diffusion）するべき，という見解が南部指導者層に見られ，これは奴隷人口を拡大する西部に拡散することで東部での奴隷人口密度を低下させ，段階的に奴隷を解放していく計画であった。奴隷人口の集中を恐れていたプランター層は国内外からの奴隷反乱の情報に脅威を感じ，奴隷を最も必要とされる地域に送り出すことが経済的に効率的であり，南部全体にも利益となり，奴隷も所有者から良い待遇を受けるであろうと説明し，この見解を支持・正当化していた。バージニアはこうした指導者層の思想の下で，余剰奴隷を経済的に必要な地域に送り込む，最大の奴隷供給州となっていく。独立後，チェサピーク湾岸地域は1790年の時点でアメリカ全土の奴隷人口の45%以上を抱え，特にバージニアは1790年から1810年の間に64,000人以上の奴隷を州外に移送し，1810年代にはバージニア州の海岸地域に住んでいた奴隷の４人に１人は州外へ売却されていた。こうした状況からバージニアは「新世界のギニア」と呼ばれ，西部へ奴隷を送り込んだことから「アメリカの半分を黒人化した州」と言われた。ウィリアム・アンド・メアリー・カレッジのトーマス・デュー教授（Thomas Dew）は1831年に，バージニアの役割は「奴隷の世話をし，奴隷を組織的に育てることを奨励し，できる限り多くの数の奴隷を育てることである。バージニアは事実上，他の州にとって必要な奴隷を育てる州である」とコメントしたことはよく知られている[13]。

国内奴隷取引の起源であるが，18世紀半ばには既に借金の肩代わりとして，また収支の均衡・維持のため，奴隷の売却は頻繁に用いられる手段となっていた。特に相続や所有者死亡の際の財産の売却には，奴隷の売却も含まれており，プランターの間では「奴隷は確実な収穫をもたらす」という視点が徐々に広まり，「主人が新しい家を建てたければ，１，２人の奴隷を売却する」ことが習慣化していた。奴隷人口の増加とともに，農産物の取引に従事していた植民地商人たちは平行して奴隷取引にも参入し始めたが，この時期の奴隷取引はまだ近隣で行われ，長距離の取引や植民地を越えての取引は少なかった。18世紀末になると，各州が次々と大西洋貿易での奴隷輸入禁止法を成立させたため，奴隷はより長距離の取引の対象となり，奴隷取引の目的も以前と比べて多様化し，そのプロセスもより組織的になっていった[14]。

19世紀初頭になると，奴隷売却を生活の必要に応じて行う者もいたが，奴隷所有者の大半は余剰奴隷による収入確保の機会を逃さず，投機的目的で奴隷を売却する者が増加した。こうした事態は奴隷所有者の奴隷に対する意識に影響を与え，所有奴隷を売る，売らないにかかわらず，奴隷は相対的な市場価値を持つ商品である，という意識を植え付けることになった。この意識の定着は都市部での奴隷市場の出現，およびバージニアをはじめとする東部諸州の若年層の州外への移住の増加と平行して起こり，奴隷所有者だけでなく，南部人にとって，奴隷は明確な価値を持った商品として南部人の間で売買される対象という共通認識が形成されていった[15]。

---

[13] ジェファーソンの漸次的解放計画について，明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念―アメリカ合衆国建国史序説―』ミネルヴァ書房，1993年，91-98頁参照。Deyle “Irony of Liberty,” pp.45-49; Rothman, “Domestication,” pp.3-40; Allan Kulikoff, *The Agrarian Origins of American Capitalism*, University Press of Virginia, 1992, pp. 226-263. 国内外の奴隷反乱の影響については注38参照。数値はPhilip Troutman, “Slave Trade and Sentiment in Antebellum Virginia,” Ph.D. diss., University of Virginia, 2000, pp.24-25. 引用はGeorge M. Weston, *The Progress of Slavery in the United States* (1857), in Robert E. Conrad, *In the Hands of Strangers: Readings on Foreign and Domestic Slave Trading and the Crisis of the Union*, The Penn State University Press, 2001, pp.223-228.

[14] Deyle, “The Irony of Liberty,” pp.52-59; Tadman, *Speculators and Slaves*, pp.17-19.

[15] Bancroft, *Slave Trading in the Old South*, p.13. 若年層のバージニアからの移住についてはとくにDavid Hackett Fischer and James C. Kelly, *Bound Away: Virginia and the Westward Movement*, University Press of Virginia, 2000. 参照。

このような経緯から，1810年代までには専門化した奴隷商人が出現し，1820年代，30年代に綿花生産が拡大すると奴隷取引は巨大ビジネス化していく。1830年代にはバージニア州から120,000人以上の奴隷が州外に取引されたと言われている。アンティベラム期末期になると，デイルは南部の奴隷に30億ドル以上の資本が投資されたと推計しており，これはアメリカ国内全体で製造業に投資された資本の３倍以上，国内経済で流通していた全通貨価値の７倍以上にあたり，連邦政府の国内予算の48倍以上の額に相当する。奴隷への投資は土地投機とともに南部人が死守した資本投資形態であった。この数値から，奴隷取引とその市場が円滑に機能することが南部経済の存続と拡大にとって欠かせない重要な要素であり，奴隷取引商人の存在とプランターによる奴隷への継続的な投資がこの巨大ビジネスを支えていたことが分かる[16]。

一方，同時代の奴隷制廃止運動の指導者たちはこの取引がアッパー・サウスにとって経済的に極めて重要であることを認識していた。廃止運動指導者の一人，アルヴァン・ステュワート（Alvan Stewart）は仮に国内奴隷取引を禁止した場合，奴隷制経済を崩壊させ，アッパー・サウス諸州は余剰奴隷を売却することができず，「疲弊しつくした奴隷の土壌では支えきれない人口の重みで沈む」であろうと述べている。取引が停止すると，ディープ・サウスでは「過剰労働，過小摂取と不健康な気候によって作り出された荒廃をなくすため，奴隷労働を放棄し，自由黒人をかなり高い割合で雇わざるを得なくなるであろう」と予測した。別の奴隷制廃止論者は「国内奴隷取引は奴隷制の最大の急所である」と指摘し，南部経済の根幹にある制度であると述べた[17]。つまり，19世紀前半には南部でも北部でも，奴隷取引が南部経済の中枢に位置する経済活動であることは広く知られ，その円滑な運営の上に南部の将来が築かれることを認識していたといえる。次に，取引の順調な継続のために奴隷商人が実際にどのような工夫をし，戦略を立てたのか，詳しく分析する。

Ⅱ．奴隷商人のネットワークと経営

奴隷商人は毎年，北部南部両方の金融動向，国内外の綿花生産および需要，さらに生産物価格の推移などを計測し，奴隷売却戦略を決定した。奴隷商人も他の輸出品目を扱う商人同様，様々な障害に直面する恐れがあり，国内だけでなく，ヨーロッパ，南米やカリブ海諸国の動向に取引活動を大きく左右された。奴隷取引と奴隷商人は同時期のアメリカ「市場革命」期に促進された様々なビジネスの特徴を網羅していたと言える。奴隷商人はとりわけ，綿花価格の変動，資金調達，州法による取引の制限，奴隷の身体の安全について，細心の注意を払っていたこと，さらに国内外から様々な情報が入る中，その情報を利用し，徐々に効率的な経営戦略を立てていく過程が奴隷商人の史料の分析から解明できる。

奴隷商人という職業について社会における一般的な評判や特徴の詳細はここでは省略するが，取引規模によって奴隷商人を３段階に分類することが可能で，ここで登場する奴隷商人のバラードは奴隷商人としては最も数の多い，取引規模の小さい商人から活動を開始し，他の商人らとパートナーシップを組むことで徐々に取引範囲と規模を拡大していった。また，国内奴隷商人は大西洋奴隷貿易の時代とは異なり，取引の現金決済を好んだ。大業者は都市部のオークションで奴隷を売却するための事前準備に余念がな

[16] Gudmestad, *Troublesome Commerce*, p.20; Deyle, Carry Me Back, introduction.

[17] アッパー・サウスはバージニア，メリーランド，ディープ・サウスはルイジアナ，ミシシッピを中心とした領域を指す。David L. Lightner, “The Door to the Slave Bastille: The Abolitionist Assault upon the Interstate Slave Trade, 1833-1839,” *Civil War History*, Vol. 34, 1988, pp.241-244.

く，活発な宣伝活動や奴隷の外観を良く見せるなど，「売れる商品」になるよう様々な工夫した。奴隷を性別，技能，身体的特徴などによって分類し，それぞれの価格をつけ，どのような奴隷が市場で好まれるかといった購入者の嗜好を入念に調べることも怠らなかった[18]。ここでバージニアの奴隷商人バラードの活動の詳細な分析に入る。

（1）バラードの活動とパートナーシップの形成

まず，バラードという人物について説明する。彼はバージニア州リッチモンドとスポッツィルベニア郡を拠点に奴隷商人としての活動を開始し，活動の初期段階で地元の奴隷商人のジョセフ・アルソップ（Joseph Alsop）と業務提携し，1820年代前半にバラード・アンド・アルソップを設立した。バラード・アンド・アルソップの実質の取引活動はバラードが中心であったことが分かっている。バージニア内で活動する中で，1820年代後半に南部内で最大級の奴隷取引業者となったフランクリン・アンド・アームフィールド社（以下F&A社，1828年設立）とパートナーシップを結んだ。F&A社は数多くの奴隷商人と業務を提携して大ネットワークを形成し，バラードはそのネットワークの中でリッチモンドを中心に奴隷の購入に特化していくことになる。F&A社のネットワークを利用して取引範囲を拡大する過程で，商人としての能力・知識と富を蓄積していったバラードは1830年代後半にミシシッピ州に移住し，綿花プランターとして成功を収めることになる。バラードのように，奴隷商人からプランターへの転進を成功させた例は稀であるが，彼の文書はこれまでの歴史分析ではほとんど触れられなかった奴隷取引に関する様々な事実・活動に言及しており，この文書の分析を通じて奴隷取引と商人の役割，さらに南部にとっての奴隷取引の意義について新しい見解を提供できると考える[19]。

F&A社が取引規模を拡大する手段の一つは，バージニアとメリーランドを中心に，奴隷を購入する業務提携者やパートナーのネットワークを構築することであった。これらの州の小規模業者の多くはそれぞれ地元で奴隷を集め，F&A社の南東部の拠点であるバージニア州アレクサンドリアに奴隷を送り，アレクサンドリア在住のジョン・アームフィールド（John Armfield）が管理するF&A社所有の奴隷用滞在施設に全管理を一任し，西部への売却を委託していた。同社は小規模業者の集めた奴隷の販売を収益の半分で請負っていた。表1は確認できる同社の提携業者である。提携業者のネットワーク拡大はF&A社の奴隷輸送を効率化し，市場での存在力を増し，地域的な独占を可能にした。さらに，大業者であるがゆえに仲介業者との関係において資金的に優遇されたため，取引業界での評判・信用も高まり，奴隷売却数の増加，収益の増加をもたらすという循環が達成された。

ここでバラードがF&A社と業務提携した際の契約書（1828年2月28日契約，1831年3月15日，1833年5月6日に更新）について分析する。契約書では，双方が「互いを信用し，手腕を評価しあい，〔利益を出せる〕自信」に基づき，互いの財産を増やし，「奴隷の購入と売却の取引・ビジネスについて提携者・パートナーとなる」ことが確認されている。また，同契約書に

[18] 奴隷商人の特徴については多くの事例からこれまでの研究で詳しく分析されている。特にJohnson, *Soul by Soul*; Deyle, *Carry Me Back*を参照。

[19] Ballard Papers, Southern Historical Collection, University of North Carolina at Chapel Hill. アイザック・フランクリンに関しては次の研究書もあるが，バラード文書は用いられていない。Wendell Holmes Stephenson, *Isaac Franklin: Slave Trader and Planter of the Old South; with Plantation Records*, Louisiana State University Press, 1938. ジョン・アームフィールドはアイザック・フランクリンの姪の夫にあたる。

表１　F&A社のバージニアとメリーランド近辺の提携業者

業者	場所
R.C. Ballard and S. Alsop	Fredericksburg and Richmond, VA
J.M. Saunders and Company	Warrenton, VA
George Kephart and Company	Frederick, VA
James F. Purvis and Company	Baltimore, MD
John Ware	Port Tobacco, MD
A. Grimm	Fredericksburg, VA
William Hooper	Annapolis, MD
Thomas M. Jones	Easton and eastern shore of MD
Birch & Jones	Washington, D.C.
Overly and Sanders	Virginia (location unclear)

出典）Ballard Papers, Volumes. Deyle, Carry Me Back, p.104n18.
注）A.Grimmは一時バラードのエージェントであった。エージェントについては次項で説明。VA=バージニア、MD=メリーランド。

はバラードとアルソップが「パートナーシップの利用と利益のためだけに黒人奴隷を購入するのであって，それ以外の用途や利益のために購入してはならない」とし，その奴隷を「海路または陸路で移送すること」を明記している[20]。

同社との契約はバラードにとって２段階の契約になっていた。第１に，バラード・アンド・アルソップはF&A社と奴隷購入に関して契約し，その会社（F&A 社の支店，リッチモンド拠点）の名前をR・C・バラード・アンド・カンパニーとする。第２に，ニューオーリンズを拠点に西部で奴隷売却に特化した会社としてフランクリン・バラード・アンド・カンパニーを設立し，後者に関してはニューオーリンズに拠点を持つアイザック・フランクリン（Isaac Franklin, 以下Ｉ・フランクリン）とミシシッピ州ナチェズ在住の甥に当たるジェームズ・フランクリン（James Franklin, 以下Ｊ・フランクリン）が売却に専念する，という内容であった。また，F&A社，R・C・バラード・アンド・カンパニー（F&A社の支店）とフランクリン・バラード・アンド・カンパニーはそれぞれ資金的に独立していたが，全体の監督者としてＩ・フランクリンが経営の指揮を取った。契約書によるとF&A社とバラード・アンド・アルソップは新たな１支店と１社の設立に合計それぞれ20,000ドルずつ出資しており，契約後も基本的に出資金に応じて利益を折半した。F&A社と業務提携する商人は多くいたが，同社とのパートナーシップの利点の一つは同社が海路輸送に強みを持っていた点がある。同社は多くの自社船を所有していたため，アレクサンドリアから奴隷を西部へ輸送する手段が確保できていた。先に述べたように同社所有の船は地元の商人の集めた奴隷の輸送も請け負っており，当時の新聞広告でも輸送船の出発日付・時刻などが宣伝されていた[21]。

[20] Agreement between Franklin & Armfield and Ballard and Alsop, May 6, 1833 (renewed), folder 421, Ballard Papers. 本論文における引用文中にある〔　〕は筆者の注記である。

[21] F&A社所有が確認される船はUnited States, Tribune, Isaac Franklin, Uncas。10月から５月の奴隷取引のシーズンは毎月2回アレクサンドリアから出航する，という宣伝が出たこともあった。F&A社の購入奴隷のすべてが自社船で運ばれたわけではなく，他社所有船に奴隷の輸送を委託した例も多く見られた。例えば，Ariel とJames Monroeはノフォークから，Shenandoahはジョージタウンから出航し，F&A社も利用した。Stephenson, *Isaac Franklin*, pp. 27, 42-43; Donald M. Sweig, “Reassessing the Human Dimension of the Interstate Slave Trade,” *Prologue: The Journal of the National Archives*, Vol. 12, 1980, p.8.

F&A社全体の取引は1830年代前半のピーク時に年間で1,200から1,500人以上の奴隷を輸送したと推測されているが，陸路での奴隷の移動は数値の判別が難しく，海路輸送の記録もすべて残っているわけではないため，実際の年間移動数はこれ以上の数値であったと予測できる。バラード自身は1833年に最大で500人以上の奴隷をバージニアで購入し，F&A社のネットワークで南西部に送っていたことが判明している[22]。契約書にはそれぞれ売却・購入のエージェントを雇うことが記載されており，バラードの売買記録にはアンドリュー・グリム（Andrew Grimm）やJ・ブレイキー（J. Blakey）などエージェントの役割を果たした人物名が登場している。彼らはバラードに代わりに遠方に赴いて奴隷を集める小規模商人的役割を果たした。

史料から確認できるF&A社による奴隷の海路輸送は表2に示されている。また，表3はバラードが購入し，西部へ送った奴隷の数を示している。

表2　確認できるF&A社の奴隷の海路輸送

輸送日	船名	確認できる奴隷数
Oct.22, 1828 (B)	--	201
Dec.26, 1828 (C)	Lafayette	46
Jan.26, 1829 (B)	--	110
Oct. 30, 1829 (B)	--	140
Nov.21, 1829 (B)	--	90
Dec. 24, 1829 (B, C)	Shenandoah?	B=120, C=40
Jan. 8, 1831 (C)	Lafayette	100
March, 1831 (C)	United States	141
March 10, 1831 (C)	James Monroe (Norfolk)	112 (73 of F&A, 41 to Franklin)
March 10, 1831 (B)	--	111
March 31, 1831 (B, C)	Lafayette	B=59, C=89 (70 to Franklin)
Sept. 27, 1831 (A)	Tribune	25 (Ballard)
Oct. 15, 1831 (A,B)	Lafayette	A=32, B=112
Nov. 12, 1831 (B)	--	21
----- (A)	Industry	69
Feb. 13, 1832 (A, B)	Ajax?	A=45, B=116
March 14, 1832 (B)	--	131
March 19, 1832 (A)	Tribune	35
Nov. 2, 1832 (A)	Tribune	41
Nov. 26, 1832 (B)	--	106
Jan. 16, 1833 (C)	Lafayette	83 (40 to Franklin)
Jan. 22, 1833 (C)	Tribune	68
Jan. 25, 1833 (C)	Ariel (Norfolk)	89 (50 to Franklin)
Jan. 28, 1833 (A,C)	Tribune	A=38, C= 43 (Ballard)

[22] バラードが陸路で奴隷を送ったことは史料から確認できる（1832年8月，1833年8月に一度に90人から100人の奴隷を数回，送っている）。アームフィールドが陸路で監督者として同行した奴隷輸送の目撃証言が当時の旅行記に記され，それによると300人近くの奴隷が手錠と足かせをつけ，互いに鎖でつながれた状態でナチェズに向かっていたという。Volumes 1832, 1833, Series 5, Ballard Papers. George W. Featherstonehaugh, *Excursion through the Slave States, from Washington on the Potomac to the Frontier of Mexico: with Sketches of Popular Manners and Geological Notices*, Harper & Bros., 1844, pp. 36-38.

March 15, 1833 (C)（＊１）	Tribune	26
March 21, 1833 (A,C)	Tribune	A=85, C=85
May 24, 1833 (B)	--	71
Oct. 16, 1833 (B,C)（＊２）	Tribune	B=92, C=93 (53 to Franklin)
Oct. 21, 1833 (A)	Tribune	63
Oct, 1833 (A)	Ariel	1
Nov. 1, 1833 (A)	Orion	19
Nov. 4, 1833 (A)	Uncas	65
Dec. 9, 1833 (A)	Tribune	62
Jan. 5, 1834 (A)	Suzanna	30
Jan. 13, 1834 (B)	--	124
Jan. 17, 1834 (A)	Uncas	55
Feb. 20, 1834 (A)	Tribune	25
April 8, 1834 (B)	--	29
April 14, 1834 (A)	Tribune	34
April 17, 1834 (B)	--	105
Nov. 1, 1834 (C)	Orion	32 (Ballard)
Feb. 5, 1835 (B)	--	156
Feb. 26, 1835 (B)	--	162
March 26, 1835 (B)	--	201
Oct. 1, 1835 (B)	--	151
Oct. 6, 1835 (B)	--	143
Oct. 16, 1835 (C)	Tribune	140
Oct. 16, 1835 (C)	United States (Norfolk)	150
Nov. 6, 1835 (B)	--	174
Nov. 16, 1835 (B)	--	170
Dec. 1, 1835 (B)	--	171
Dec. 26, 1835 (B)	--	110
Jan. 27, 1836 (B)	--	140
Nov. 15, 1836 (B)	--	254

出典）第１列は（　）内に記したA,B,Cで出典が異なる。 A：Series 5, Volume 1-5, folder 416-422, 463, Ledger of Ballard and Co. 1831-1834, Vol. 38. Ballard Papers, Southern Historical Collection, University of North Carolina at Chapel Hill. B：Inward Slave Manifests of New Orleans, 1828-1836, U.S. Customs Service, National Archives. Sweig, "Reassessing the Human Dimension," p. 21から再引用。C： Stephenson, *Isaac Franklin*から再引用。２つの史料で確認されたものは出典を２点とも記したが、出典によって奴隷数が異なる場合が多い（第３列）。

注）上記BのSweigの編集したデータには船名および乗船していたF&A社所有ではない奴隷数が記されていない。輸送日の記録を比較するといくつかの船の情報が重なるため、それらに関しては第２列でいずれかの史料から船名が判明する場合は記し、第３列には確認できる数を史料別に記してある。

（＊１）1833年の３月15日と次行の３月21日の記録に関しては、Tribune船は１隻しか確認されず、東部から西部へ輸送して船が戻るまで数週間かかったことから、これら２つの記録は同じ輸送である可能性がある（日付の誤りの可能性）。

（＊２）注１と同様に、1833年10月16日と10月21日に関しても同じ船である可能性が高い。

表３　バラードによる輸送奴隷数

年	合計	男性	女性
1831	126	71（56.35%）	55（43.65%）
1832	207	96（46.40%）	111（53.60%）
1833	551	333（60.40%）	218（39.60%）
1834	57	30（52.63%）	27（47.40%）
不明	15	9（60.00%）	6（40.00%）
計	956	539（56.40%）	417（43.60%）

出典）Series 5, Volumes, folder 417-422, Ballard Papers.

奴隷取引の最大の特徴の一つが現金決済の普及であったが，これは将来の作物生産の予測をもとに貸し出す長期のクレジットよりは，銀行や他の仲介業者から短期で現金を借り，現金で決済することで，より迅速な支払い回転率の実現が可能であったからである。F&A社の記録では，ナチェズとニューオーリンズで行われた取引の70%近くが現金で行われ，コリコフの研究によると，ニューオーリンズの奴隷市場で発行された数千の売渡証の詳細な分析の結果，奴隷取引の74%が現金で行われたことが判明している。残りは６ヶ月から最長で12ヶ月以下のクレジットで決済されていたと考えられる。南部の銀行でもクレジットおよび現金の提供は行われ，バンク・オブ・ノースカロライナでは資金の３分の２を奴隷商人に貸し出していたことから州議会で問題になったほどであった[23]。一般に出回っていた約束手形は60日から90日の間に現金化する必要があり，手形引受商社に利子をつけて返済するか，為替手形によって返済された。ただし，商人が期日前に交渉して割引額を現金で受け取ることは可能であった。実際，この時期南部で最も流通していた貨幣形態は割引された銀行券であり，商人たちは為替手形の比較価値や，最も率の良い手形の受け取りに関する情報に非常に敏感であった。こうした状況は，南部商人が全国の金融動向に対応する必要性を生じさせ，実際，南部の銀行による貸し出しよりは，北部の銀行の方が正貨を十分確保していることから信用度が高く，より良いプレミアムを提供していたことから，南部商人の間では北部の銀行を通して資金を得ることが定着していた[24]。

F&A社とバラードに関して，まずバラードが「最初に資金を奴隷に投資し，F&A社はその知らせ，あるいは要求に応じて資金の額を支払う」と契約書に記されている。I・フランクリンは頻繁にバラードやアームフィールドが奴隷購入に十分な資金を有しているか確認し，仲介業者を通して一度に20,000ドル以上の資金を送金することがあった。追加資金が必要になれば，フランクリンは「地元バージニアの銀行で60から90日のクレジットで借りれば，受け取り可能な手形の形で送金する」ことを約束した[25]。南部の銀行や仲介業者は時に準備金不足から長

[23]Tadman, *Speculators and Slaves*, pp.52-55, 102-105; Johnson, *Soul by Soul*, p.6;. Laurence J. Kotlikoff, “The Structure of the Slave Prices in New Orleans, 1807-1862,” *Economic Inquiry*, Vol. 17, 1979, pp.496-518.

[24]Deyle, *Carry Me Back*, p.129; Edward E. Baptist, “‘Cuffy,’ ‘Fancy Maids,’ and ‘One-Eyed Men’: Rape, Commodification and the Domestic Slave Trade in the United States,” *American Historical Review*, Vol. 106, 2001, pp.1619-1650; Woodman, *King Cotton,* pp.156-169.

[25]Isaac Franklin to R.C. Ballard & Co., 26 August 1833, folder 11;Isaac Franklin to Ballard, 9 January 1832, folder 4, Ballard Papers.

期のクレジットを提供できない場合もあったが，資金的に潤う北部の商人や銀行からは１回12ヶ月のローンを受けることができた。銀行で換金ができないときはシェーバーと呼ばれた手形仲介人，または高利貸しに頼る商人も多く，Ｉ・フランクリンは1834年に資金繰りが悪化した際，彼のみが「ニューオーリンズで唯一高利貸しに頼らずにクレジットを維持している，他の商人たちは全員死に瀕している」と記している[26]。

パートナーシップに組み込まれている利点として，ある特定のパートナーが資金的に困窮した場合，資金を提供しあうことができた点もあげられる。アームフィールドが資金難で銀行への返済が滞っていた際，Ｉ・フランクリンはバラードからアームフィールドに資金を送金するように命じ，同時にＩ・フランクリンは他のパートナーから資金調達したことがあった[27]。また，強力なパートナーを持つことで有利に働いたのは商人としての評判であった。市場において，また情報の獲得において，さらには銀行からの資金の借り入れや保険契約の際にも，大業者の信用度の高さは契約を取り付けやすくした。主に1840年代以降，R. G. Dun & Co.による商人の信用調査が実施されていたが，その中でも奴隷取引にかかわる商人は評判が悪い例が多く見られたため，資金調達が困難な場合が多かった。しかし，大業者は経営も安定し利益率も高いことから，社会的批判を避け，業界の信用を得ることが可能であった[28]。続いて，奴隷価格の決定と売却に大きく影響した，作物価格，奴隷の安全と各州法の制定の３項目について取り上げる。

（２）作物の価格

奴隷価格の決定は同地域の農作物価格の影響を受けた。特に西部での奴隷売却市場はルイジアナの砂糖産業の影響もあったが，一般には綿花価格が最大の決定要因であった。1820年代以降，明確な相関関係の見られた綿花価格と奴隷価格であったが，1850年代になると奴隷価格はかつてない高値をつけ，綿花との相関関係は見られなくなった。奴隷への投機熱に火がつくと同時に，海外市場における綿花需要の拡大も手伝い，プランターは綿花価格がさらに上昇すると予測したため，奴隷の需要が急激に伸びたことが原因といわれている。また，1850年代はそれまで１年の中で時期を限定した取引であった奴隷売買が１年を通して活発に行われる取引となっていたことも要因の一つであると考えられる[29]。

F&A社の例では，Ｉ・フランクリンがバラードに南東部からの奴隷の輸送を停止するように指令を出すこともあった。1832年５月にＩ・フランクリンはバージニアの奴隷市場の方が南西部市場より奴隷価格が良くなると推測したが，それは西部での作物生産，特に綿花生産高が低い年になる予想から判断したものであった。彼は「バージニア市場での〔奴隷〕価格をルイジアナでの価格と同じ水準にまで上げることになった場合，〔バージニアで〕売却してしまった方が船で送るよりも〔輸送費用を考えると〕良いであろう」と述べている[30]。作物生産が低調であると，プランターは奴隷購入に踏み切れないため，奴隷は南東部市場で売却してしまった方が商人にとって経済的収益性が高い。奴隷売却のタイミングについても，綿花価格がひとつの指標となったことは史料から伺える。1833年11

[26] Isaac Franklin to Ballard, 10 March 1834, folder 13, Ballard Papers.
[27] Isaac Franklin to Ballard, 8 June 1832, folder 7, Ballard Papers.
[28] Gudmestad, *Troublesome Commerce*, p.32. 19世紀の商業信用調査の記録のR. G. Dun & Co. Collection, Baker Library, Harvard University Graduate School of Business Administrationは歴史分析にも用いられている。
[29] 奴隷取引シーズンは一般に輸送が10月から５月にかけて行われ，東部での購入は10月から11月あたりにピークを迎え，初冬に終了した。Tadman, *Speculators and Slaves*, pp. 70-71.
[30] Isaac Franklin to Ballard, May 1832, folder 6, Ballard Papers.

月にＩ・フランクリンはヨーロッパ市場での綿花価格の急落によるニューオーリンズの「男性は800から900ドル」という奴隷価格が，望んでいた価格より格段に低いことをバラードに伝えた。しかし，フランクリンは「その価格で売って収入を得たほうが，綿花価格がより低下し，・・〔奴隷の価格が〕一層下がるリスクを負わないので，良いであろう。〔今の状況では〕奴隷価格はこの秋，確実にニューオーリンズとミシシッピの市場で低下するであろう」と述べ，低価格であっても奴隷の売却を決定した。また別の時には「砂糖と綿花の価格動向が非常に悪く，バージニアでの奴隷の購入価格が低下しない限り，あまり利益は得られないであろう」と伝え，可能な限りでの低価格の購入を勧めた[31]。とりわけ奴隷価格の決定に最も重要な指標となったのはヨーロッパでの綿花価格の動向であった。Ｉ・フランクリンらもその動向には非常に敏感で，ヨーロッパでの綿花価格の低下が奴隷価格の低下を引き起こすことを承知していた。これはプランターの出荷した綿花の収益がヨーロッパ市場で予想以下であった場合，プランターは奴隷購入のために高い価格を出せなくなるためである。綿花価格の短期変動は経営方針に大きく影響することから，自身綿花プランターでもあったＩ・フランクリンはF&A社の全提携業者に頻繁に価格情報を伝えていたが，史料からは正確な予測に苦心していた様子が伺える。

（３）奴隷の身の安全

奴隷を東海岸から南西部へ移動させる際には，海路・陸路ともに，奴隷の身体的安全のための注意深い監督が必要であった。どの輸送手段を用いても，奴隷が監督者である商人を襲撃する可能性があり，海路では船上での反乱の事例や，陸路での商人襲撃や脱走の事例は数多く見られた[32]。商人の史料では，このような輸送中の事故や事件，また市場に出ている奴隷の間で疫病が蔓延した場合を想定し，購入後の早い段階で奴隷に保険をかけるように呼びかけている。ある商人はリッチモンドから，「この市場での病気の蔓延はここに実際来ないとその規模を把握できない」とコレラの発生を報告し，奴隷が簡単に死に至り，極端な場合，医者の診察を受けても24時間以内に死亡するケースが多く見られたと述べている[33]。

商人にとって奴隷に様々な疫病が発生することは深刻な問題であった。大西洋奴隷貿易の中間航路での死亡率は13.2%程度であったとされており，国内の移動は期間も短いことから平均死亡率は低かったと推計されるものの，疫病発生による大量死は経営に大打撃となった[34]。この時期の奴隷取引で最もよくみられたのはコレラと黄熱病の発生で，高い死亡率が見られた。天然痘も広まったが，天然痘はワクチンの接種が可能であったため，大規模な発生を抑えることが可能であった。1832年４月に，ナチェズからＪ・フランクリンは「麻疹の発生で，船内が混み合っていたことから，大量の奴隷が病気で

[31] Isaac Franklin to Ballard, 1 November 1833, folder 11; James Franklin to Ballard, 14 November 1833, folder 12, Ballard Papers.

[32] 国内奴隷取引の海上での奴隷反乱として，ボルチモアの奴隷商人オースティン・ウールフォルクの輸送した奴隷がボルチモアからニューオーリンズに向かうDecatur船内で反乱を起こした例や，チェサピークからニューオーリンズに向かっていたCreole船でも反乱が置き，カリブ海の島に漂着した例があった。Gudmestad, *Troublesome Commerce*, pp.46-47; Philip Troutman, “Grapevine in the Slave Market,” in Johnson ed., *The Chattel Principle*, pp.203-233. F&A社所有のComet船は1831年１月に164人の奴隷を乗せてアレクサンドリアを出航したが，（76人がF&A社の奴隷）イギリス領ナッソーに漂着し，乗船していた奴隷は全員解放された。フランクリンは76人中40人をMississippi Marine and Fire Insurance Company，36人をLouisiana State Insurance Companyに保険をかけていたため，合計37,555ドルの保険金を得た。奴隷数が多く，白人監督者が少ない陸路での襲撃や反乱も度々見られた。Stephenson, Isaac Franklin, pp.40-41.

[33] Philip Thomas to William Finney, 1 February 1859, William Finney Papers, Duke University, Perkins Library Manuscripts. U.B. Phillips, *American Negro Slavery*, p.197.

[34] Richardson, “British Empire and the Atlantic Slave Trade,” pp.448-454.

ある」と知らせている。その年に麻疹で死亡した奴隷は一人であったが，翌年には新たにニューオーリンズでコレラが発生した。Ｊ・フランクリンは，「現在，ニューオーリンズではまだ数例しか確認されていない。この場所〔ナチェズ〕にいる奴隷に関して私は〔感染を〕恐れてはいないが，船で〔東部から〕送られてくる奴隷に関しては大いに不安である」と述べている。Ｊ・フランクリンはコレラの発生を受けて当初はバラードに対し，購入した奴隷をすべて地元バージニアの市場で売ることを命じたが，後日指示を変更し，「〔今の段階では奴隷を売らずに〕保持することが最良の策である。〔西部で疫病により〕失われた奴隷数が多いほど，獲得する手段さえあれば欲しがる者が増えるであろう」と指摘し，奴隷価格が高騰することを期待した[35]。

さらに数日後，アジアティック・コレラによってＩ・フランクリン所有の奴隷数人が死亡し，地元の人々は感染の「危険を察知し，誰も〔F&A社の奴隷を〕購入しようとせず」，この２週間で「アレクサンドリアを奴隷が出航した後，９人の〔成人〕奴隷と６，７人の子供が死に，現在７，８人が病気にかかっている」状態で，Ｉ・フランクリンにとってこのような事態はこれまでで最大の試練であると吐露している。コレラの発生によって南西部市場から購入者が一時的に大量に撤退したことで，F&A社が資金的に逼迫し，Ｉ・フランクリンはバラードに対し，バージニアでの購入価格を下げない限り今期の収益は出ないと指摘している[36]。

疫病（天然痘）の発生を防ぐ一つの手段としてワクチンの接種があった。当時ワクチンは供給不足の状態にあり，Ｊ・フランクリンは「町でコレラのケースが数件見られ」，さらに「市民が疫病〔天然痘〕の発生は我々の奴隷が根源であると言っている。さらに悪いことにワクチンが全く手に入らない」と述べていた。にもかかわらず，バラードは「出航前に天然痘のリスクの高さとワクチンを接種の必要性を指摘されていたにもかかわらず，当初完全に指摘を無視し，シーズン末期になって既に当社が5,000～6,000ドルの損失を被り，最後に〔西部に〕到着した船に乗っていた奴隷も半分以上がワクチンの接種を受けていない状況であった」とＩ・フランクリンに批判されている。彼は，西部でワクチンの取得が困難になっていたため，奴隷の出航前のワクチン接種を望んでいた。出航前であれば船内での疫病の蔓延を防ぐことができるからである。奴隷市場内で疫病が広まり，F&A社の奴隷が発生源であった場合，業者としての評判が傷つくため，所有奴隷の疫病は最も避けたいことであった。1833－1834年度のシーズンの終わりにＩ・フランクリンはバラードに翌シーズンは「ワクチンの接種を受けていない奴隷の輸送や，すぐに現金で売却できなさそうな奴隷を購入することは決してしないように。売れない奴隷，疫病にかかった奴隷は既に途絶えることなくこちらに向かっている」と指示を出した[37]。F&A社にとって，疫病の発生とそれに伴う市場における信用の低下は経営に悪影響を及ぼすため，取引対象である商品化された奴隷について，購入者の手に渡るまではその健康・安全の確保に尽力した。

---

[35] James Franklin to Ballard, 23 November 1832, folder 8; Ballard to Isaac Franklin, 2 December 1832, folder 8, Ballard Papers.

[36] Isaac Franklin to Ballard, 8 December 182, folder 8, Ballard Papers.アジアティック・コレラは1832年にヨーロッパから世界中に広まった疫病で，アメリカにはニューヨークから入り，南部には1832年秋に広まり，翌年になって大打撃を受けた。また同年には別ルートで，カリブ海諸島からニューオーリンズとチャールストンに入り，様々な交通網により広範囲に広まった。ニューオーリンズでは確認された死亡者数が5,000人を超えた。George C. Kohn, *Encyclopedia of Plague and Pestilence*, Facts on File, 1995, pp. 336-337.

[37] James Franklin to Ballard, 2 February 1834, folder 13; Isaac Franklin to Ballard, 18 March 1834, folder 13; Isaac Franklin to Ballard, 13 May 1834, folder 14, Ballard Papers.

（4）各州法による規制

1830年代に奴隷取引の障害となったのは各州政府による州際の奴隷取引を制限する法律の制定であった。ほとんどの南部州で，州外からの奴隷の輸入を制限する法を制定したが，これらの法は概して強い拘束力があるものではなかった（表4）。他州からの奴隷輸入を停止する理由は大きく分けて二つあった。第一に州外へ正貨や資本が流出することを防ぐため，第二に州内奴隷人口の増加が社会的不安につながるという認識があったためである。

表4　州外からの奴隷輸入を禁じる州法の制定年

州	年
アラバマ	1827-29，1832
ミシシッピ	1837-46
ルイジアナ	1826-28，1831-34
ジョージア	1817-55
テネシー	1825-53

出典）Tadman, *Speculators and Slaves*, chap. 2.

世紀転換期にはサンドマングにおける奴隷反乱の発生で，脱出した奴隷が大量に南西部の砂糖生産地に流入するのではないかという不安が社会を脅かした。実際，1791年から1810年までの間にルイジアナに漂着した奴隷が15,000から20,000人ほどいたと推測されている。1800年にバージニアにおいて発生したガブリエルの反乱で社会不安は一層広まった。多くの南部の指導者たちは奴隷人口の集中，奴隷のコミュニティ間での交流の活発化は，奴隷が社会情勢を察知し，地理的感覚を養い，国内外の出来事の情報を得る機会を与え，所有者層への反発を強める契機になると考えていた。18世紀後半から19世紀にかけて多くの東部諸州がアフリカからの奴隷の輸入を制限する措置をとった際と類似した理由で，西部諸州は州際の奴隷取引に制限を加えることになった。こうした法律の制定は制定直後に情報が南東部の奴隷市場に伝わり，実際1826年のルイジアナでの法律で，売却目的で同州内に奴隷を輸入することが禁止されると，その直後にリッチモンドの市場奴隷価格が25%下落した[38]。

ルイジアナでは，1829年に反乱を起こす性質でないことを記した証明書（certificate of good character）を持つ奴隷以外は輸入しないことを法律で規定した。1831年2月にI・フランクリンはニューオーリンズから「この州の議会は会期中で，取引へのすべての道を閉ざすつもりでいる・・こちらに向かっている奴隷を押収できるように法律を作っている」と書いている。I・フランクリンは規制が強化され，取引業者やプランターも州当局から告発されることを恐れていた[39]。

1831年にバージニアで発生したナット・ターナーの反乱を受けて，ルイジアナ州議会では同年11月19日に新しく州に移住してきた者と現在の居住者に関して，奴隷を自身で使用するため

[38]Gudmestad, *Troublesome Commerce*, pp.108-109; サンドマングの反乱の影響についてはJames Sidbury, “Saint Domingue on Virginia: Ideology, Local Meanings, and Resistance to Slaves, 1790-1800,” *Journal of Southern History*, Vol. 63, 1997, pp.531-552; David P. Geggus, *The Impact of the Haitian Revolution in the Atlantic World*, University of South Carolina Press, 2001; Fehrenbacher, *Slaveholding Republic*, pp.111-117. ルイジアナへの奴隷の流入に関してはNatalie Dessens, “From Saint Domingue to Louisiaina: West Indian Refugees in the Lower Mississippi Region,” in Bradley G. Bond ed., *French Colonial Louisiana and the Atlantic World*, Louisiana State University Press, 2005, pp.244-264. ガブリエルの反乱についてはJames Sidbury, *Ploughshares into Swords: Race, Rebellion, and Identity in Gabriel's Virginia, 1730-1810,* Cambridge University Press, 1997; Douglas R. Egerton, *Gabriel's Rebellion: The Virginia Slave Conspiracy of 1800 and 1802*, University of North Carolina Press, 1993.

[39]Isaac Franklin to Ballard, 2 February 1831, folder 1, Ballard Papers. Stephenson, *Isaac Franklin*, pp.73-76. Certificate of Good Character を用いた研究としてHerman Freudenberger and Jonathan B. Pritchett, “The Domestic Unites States Slave Trade: New Evidence,” *Journal of Interdisciplinary History*, Vol.21, 1991, pp.447-477.

に持ち込むことは許可したが，取引業者が持ち込むことを禁じる法を通過させた。法の通過時にルイジアナ州は取引業者に対して30日後の1831年12月20日の施行日までに所有奴隷をすべて売却するように命じたため，F&A社はその期日までにニューオーリンズで売却予定であった奴隷と南東部で既に購入されていた奴隷合計270人が南西部に到着し，売却できるように急遽手配した。同法案がルイジアナ州で実行された場合，同社はニューオーリンズでの取引を中断し，ミシシッピ州内を中心に活動することになり，他の業者も同じ行動に出ることから，ルイジアナ市場で売られる予定であった奴隷の大量流入によってミシシッピ市場が混乱に陥る恐れがあった[40]。

さらに，同時期のニューオーリンズの情報によると，「この州の政府は奴隷の輸入をさらに規制しようとしている・・市民はいかなる場合においても奴隷を購入する代理人を持つべきではない。取引を禁止されていない他の州に自ら出向き，州内に輸入する奴隷を自ら連れて来るべきである・・州政府はテネシー州との取引を禁止した」と記している。これを受け，Ｉ・フランクリンは提携している商人にすぐに「手元にある奴隷をすべて船で送ること」，さらに「新たな指示があるまで継続して〔西部へ〕送り続け，低価格で購入し始めること」を指示した。一連の法律の制定を受けて，1832年１月にＩ・フランクリンはそれまでのテネシー州の市民権を放棄し，公式の居住地をニューオーリンズに変更した。居住地を変更することによってルイジアナの住民となり，住民としてテネシーやバージニアから奴隷を持ち込むことは法に触れなかったためと考えられる[41]。

一方，Ｉ・フランクリンは一連の法律が商人やプランターの反対から無効になることを予測していた。実際，1833年３月に奴隷輸入を禁じる州法の一部が無効となり，土地所有者自身が所有するための奴隷輸入を禁じていた条項は撤回され，奴隷輸入に関するその他の法律も1834年１月２日に撤回された。これによってF&A社はルイジアナでの奴隷売却への障害がなくなったが，10歳以下の子供を母親と別々に売ること，また有効な証明書のない奴隷を売ることは引き続き禁じられた。取引活動を制限する州法の制定は奴隷の大量流入によって生じうる社会不安や奴隷取引そのものへの批判に押される形で実現したが，結果的にはプランテーション経済に不可欠な奴隷の獲得は法律によって制限できるものではなく，あらゆる手段を用いて取引が継続された。注目すべきは，奴隷制社会の根幹にあるこの有益なビジネスを抹消しようとする試みが北部の奴隷制廃止運動の高揚を促進し，南部諸州の立法過程に長期的に影響を与えたことである。1830年代の南部で見られたこうした動きは南北間の対立が表面化していく一つの契機であったと見ることができる[42]。

Ⅲ．奴隷商人と南部社会の世界観の形成

バラードのバージニア在住時に交流のあった奴隷商人のベイコン•テイト（Bacon Tait）は，1830年代にバラードに対し，以下のように記された手紙を出した。少し長いが，奴隷商人の奴隷労働・奴隷制度に対する意識が反映されてい

[40] ルイジアナ法の詳細についてはStephenson, *Isaac Franklin*, p.73-76. 参照。Isaac Franklin to Ballard, 26 October 1831, folder 2; James Franklin to Ballard, 30 October 1831, folder 2, Ballard Papers; James Franklin to Ballard, 14 November 1831, folder 3; Isaac Franklin to Ballard, 14 December 1831, folder 3, Ballard Papers. ナット・ターナーの反乱についてはJudith K. Schafer, “The Immediate Impact of Nat Turner’s Insurrection on New Orleans,” *Louisiana History*, Vol. 21, 1980, pp.361-376.

[41] Stephenson, *Isaac Franklin*, pp.17, 77. James Franklin to Ballard, 18 January 1832, folder 4, Ballard Papers.

[42] Isaac Franklin to Ballard, 24 March 1833, folder 10; James Franklin to Ballard, 29 October 1833, folder 11, Ballard Papers. Gudmestad, *Troublesome Commerce*, p.101.

る部分を引用する。

・・南部の奴隷による生産なしには連邦の北部地域は富を蓄積することなく，存続が困難になるであろう。・・わが国，そしてほとんど世界中がこの〔制度の〕長期的継続の見込みによって平和と繁栄の恵みを受けるのである。そのような状況で，バージニアの奴隷所有者たちが効率的な労働者一人を2,000ドルで計算することは不合理であろうか。かつて，バージニアでも奴隷労働の価値がなくなり，多くの人は奴隷による生産よりも収益性のあるビジネスに従事したいという目的と期待から奴隷を売却したが，彼らはタイミングを間違ったのではないか。彼らはその時に売却しなければ，今頃より良い生活になっていたのではないか。所有奴隷の数を増やそうと精一杯，全神経を注いだ者より急速に裕福になった者がいるだろうか。バラード，君自身も何年か前に奴隷を1,500ドルで売却〔取引〕したが，そのときは購入者が悪い条件で買ったと思ったことであろう，しかし，・・購入者はトレーダーの仲介によって〔トレーダーである〕君以上に儲けており，私はこのような状態がしばらく続くであろうと思う。・・結論として，私は君が今もっている奴隷を再び同じくらいの価格で買うことは無理であることを忠告する。現在，奴隷への投資は最も有益性があり，それは他のどのような株，土地券でさえもかなわないのである[43]。

この手紙は，バラードが奴隷商人から西部のプランターへと転進する契機となったものの一つと考えられる。テイトは奴隷への投資が他のどの投資活動よりも有益であり，資産として奴隷を所有することに価値があることを強調しているが，ここで1830年代以降，このような思想が南部に広まった背景を分析する。

バージニアから西部に移住することは，建国期以来の農民を基盤とした農本主義的共和主義（agrarian republicanism）の考え，つまり家族の土地，先祖からの土地との結びつきこそ社会の安定に不可欠であるという理念に反する一方で，共和主義（republicanism）の精神に含まれる個人的自由・独立の理念，自分の土地を持つという理想では一致していた。キャシンの研究などでは，西部は個人主義の新しい価値観，競争やリスクへの挑戦を可能にする，過去からの独立実現の場として捉えられ，一方，ミラーの研究では西部移住はプランテーション社会の「心臓部の移植」であると分析し，こうした状況ではいわゆるターナー的民主主義社会は生まれにくかったと説明している[44]。19世紀になるとバージニアからの西部移住は一層増え，バージニアのある郡では１年に20%，10年で50%以上の人口を西部移住によって失ったところもあった。世紀転換期にバージニアで生まれた白人の30%以上が州外に転出した。

他方，南北カロライナ地域の大プランターはプランテーション奴隷制への信奉を深め，米，インディゴ，綿花の生産にはプランテーション経営が必須で，南部経済の将来はプランテーション奴隷制の存続にかかっていると主張した。こうした大プランターは，バージニア指導者層の

[43] Bacon Tait to Ballard, Undated correspondence (1830s), folder 30, Ballard Papers.

[44] 農本主義的共和主義，もしくは田園主義的共和制については明石紀雄『ジェファソン』，第２，３章参照。Joan E. Cashin, *A Family Venture: Men and Women on the Southern Frontier*, Johns Hopkins University Press, 1994, pp.32-36; Fischer and Kelly, *Bound Away*, pp.213-222; Rhys Isaac, *Transformation of Virginia, 1740-1790*, Norton, 1988, p.312; James David Miller, *South by Southwest: Planter Emigration and Identity in the Slave South*, University Press of Virginia, 2002. ターナー理論についてはFrederick Jackson Turner, “The Significance of the Frontier in American History,” *Annual Report of the American Historical Association of the Year 1893*, pp.199-227.

主張する段階的解放とは対照的に，奴隷は奴隷身分のままプランテーション労働に従事する必要性を説いた。このように南北カロライナとバージニアでは奴隷制の将来についての考え方が異なっていたが，両者は当面の措置として余剰の奴隷は発展する西部に送ることが南部にとって最大の利益になるという見解では一致していた。両者のこの共通項は，奴隷取引が活発化する主要な要因となったと言える[45]。

一方，憲法制定会議で見られたバージニアの奴隷制度・奴隷取引に対する人道的見解は，19世紀初頭に浸透するキリスト教親奴隷主義（Christian proslavery ideology，奴隷制擁護論）の普及により揺らぎ始めた。従来の農本主義的共和主義は徐々に親奴隷主義へと移行し，公の場において西部移住は親奴隷制の意味合いや枠組みで話されるようになった。このような背景から，奴隷制とその領域の拡大は南部全体を思想的に団結させ，プランテーション奴隷制領域を拡大していく手段としての西部移住は支持されるようになった[46]。

こうした思想的統合は奴隷取引が専門化していく過程と平行して起こり，その発展を支え，促進した。1810年代，特に1812年戦争の後に奴隷取引がビジネスとして重要性を増すが，同時期に西部移住者数も急増し始める。フランクリンらが業務を開始し，拡大していったのもこの頃である。1820年代になると政府による対南部の一連の関税政策や，バージニアでの土地価格急落を受けて，南部経済体制の存続のための西部移住の増進，という構図は一層支持が広まると同時に，対北部という地域間対立の意識が移住を助長するようになる[47]。

これらの展開を総合的に判断すると，西部移住は南部人にとって一長一短とであったと言える。まず東部諸州からの人口の流出は社会の安定を揺るがし，議会において政治的存在感を失う恐れがあると見られた。しかし，白人の移動とともに西部に奴隷が移動していくことは，奴隷制度の存続を望む新州が増えるだけでなく，南部全体として国政における政治力を安定させ発言力を増す効果があった。北部と対抗できる統一した南部を形成するという点に西部移住の意義が見出されるようになると，西部移住は南北の地域間対立と直結するようになった。この段階で，奴隷が奴隷身分のまま，西部へ拡大することは南部にとって「必要悪」（necessary evil）であり，そのための奴隷取引は絶対的で不可欠なものとなっていた。バージニアでは1820年代から30年代の綿花の急騰によって西部への奴隷の輸出が急増し，奴隷の売却で得た利益で州の経済が潤ったといっても過言ではなかった。このように1840年代までには西部移住の意味と奴隷制擁護の構図が南部で固定化した。同時に，土地の所有は重要であったが，土地以上に，奴隷所有の拡大こそが南部の経済発展の継続を支持し，南部を統一化させるという見解が支配的になった。この見解は上記のベイコン・テイトの書簡の意図と一致する。最近のミラーの研究では，「〔南部人の〕団結は土地への愛着・執着から形作られるものではなく，共通の関心

---

[45] Fischer and Kelly, *Bound Away*, pp.74, 202-203; L. Scott Philyaw, *Virginia's Western Visions: Political and Cultural Expansion on an Early American Frontier*, University of Tennessee Press, 2004, pp.96-97, 103-104, 113-114; Adam Rothman, "The Expansion of Slavery in the Deep South, 1790-1820," Ph.D. diss., Columbia University, 2000, pp.14-15, 49-50.

[46] Miller, *South by Southwest*, pp.14, 32, 40, 131; Fischer and Kelly, *Bound Away*, pp.206-208; James Oakes, *The Ruling Race: A History of the American Slaveholders*, Knopf, 1982, pp.88-90. 親奴隷主義への移行については，Jeffrey R. Young, *Domesticating Slavery: The Master Class in Georgia and South Carolina, 1670-1837*, University of North Carolina Press, 1999. 参照。

[47] 関税についてはHarry L. Watson, *Liberty and Power: The Politics of Jacksonian America*, Hill and Wang, 1990, pp.113-127. 地価急落についてはFischer and Kelly, *Bound Away*, pp.202-203, Collins, *Domestic Slave Trade*, p.26.

や経験，さらに特定の社会的思想，習慣，組織への忠誠・契約によって形作られ，それは奴隷制を擁護するという点において明瞭であった。こうした状況下では移動性は個人の，家族単位の，また階級のアイデンティティの象徴として形成されていたのである」と述べており，奴隷制擁護こそが南部人の団結をもたらしたと結論付けている[48]。

おわりに

以上，本論文では最初に大西洋経済とバージニアの関係を植民地時代から19世紀初頭にかけて，近年の大西洋史研究の成果を踏まえながら概観し，大西洋奴隷取引の隆盛・終焉から国内奴隷取引が行われるようになる背景を論じた。さらに，国内奴隷取引についてバラードという奴隷商人の事例を元に，その業務内容，ネットワークの形成，取引の特徴や障害について分析した。最後に19世紀前半に発展した奴隷取引と奴隷制度を支えた南部の思想と世界観の変容について考察し，その結果，本論文では特に以下の２点について明らかにすることが出来たと思われる。

本稿では第一に，バラード文書を中心とした奴隷商人の史料の分析から，奴隷商人は南西部への領土拡大に伴ってその取引網を拡張・緊密化し，取引が円滑に行われるように，リスクの大きな障害を避けるための情報交換を活発に行っていたことを論じた。情報は国内だけでなく，対外情勢に関わるものも多く，奴隷労働の生産物が海外市場で広く取引されるに伴い，必然的に海外での動向も奴隷の価格に影響し，奴隷商人も対応せざるを得なかった。バラードのように地元の小規模な奴隷商人として活動を開始した場合であっても，徐々に国内市場や諸外国の経済情勢を考慮した活動の戦略を立てる必要性があった。

第二に，奴隷取引と世界的作物であった綿花は密接な関係にあったため，1830年代以降，奴隷取引は南部の世界経済における位置づけを保障する，南部経済の根幹を成すビジネスとして認識され，飛躍的に成長したことに言及した。同時に，南部支配者層が綿花経済と自由主義貿易の更なる発展への絶対的自信を持ち，西部移住の意義と奴隷制拡大を直結させた思想的団結を土台として，奴隷取引の正当性を確固たるものにしていった経緯が見て取れたといえる。

19世紀前半の南部の商人やプランターは国内市場革命による効率性の促進に適応するだけでなく，同時に急速に進展する世界市場統合に対応していった。綿花や奴隷を扱った商人やプランターは，その取引活動が南部特有の社会秩序を擁護するための政治的指針に直接関わっていたため，市場の効率性・統合をより強く実感したと思われる。本論文ではバラードの奴隷商人としての活動だけを取り上げたが，彼の奴隷商人，西部移住者，綿花プランターとしての経験は南部的な企業家精神と経営のあり方について分析視角を提供するだけなく，南部がこの時期，常に拡張的・発展的であったことを喚起させる事例であるといえよう。

---

[48]南部に定着した思想は北部からの攻撃対象となったが，南部指導者層は取引を行っている奴隷商人は特殊な商人層で指導者層は彼らと距離を置いていると主張し，プランターでもある指導者層はパターナリズムの言説を用いて奴隷と良好な関係を築いていることを強調することで，直接的批判を回避しようとした。Miller, *South by Southwest*, pp.113, 137-138, 146-147.